



Title	<書評>『ポートの三人男』（ジェローム・K・ジェローム著，丸谷才一訳，中公文庫，450円）
Author(s)	張，知夫
Citation	大阪公衆衛生. 1994, 65, p. 14-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83816
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『ボートの三人男』

ジェローム・K・ジェローム著
丸谷才一訳 中公文庫 450円

ある晩ジョージとハリスと僕の3人は、例によって他愛もない世間話をしていた。1 ' が「最近どうも仕事をする気にならぬ」と言うと、あとの2人が「おれもそうだ」と言い出す。大議論の末、これは3人そろって肝臓病なのだという結論に到達。そこで最高の治療法を求めて討議を重ねた結果、2週間仕事を休み、ボートでロンドン近郊の旅に出るべきたということになった。

『ボートの三人男』は、このボートの旅で3人の遭遇する珍体験の記述という形のユーモア小説だ。これはジェローム・K・ジェローム（英国）の初期の作品で1889年の出版である。ユーモア小説の常として、筋の通ったストーリーがあるわけではない。

漱石の『猫』にしても、文体は「吾輩」による観察報告書の形をとっているが、観察者の解釈や誇張した表現自体がユーモラスなのであって、読者もそれを楽しむ。ストーリーはどうでもいい。『三人男』も同様で、図書館や満員電車の中で読むよりは、寝ころがって読む方がいい。

今から50年前、戦争末期の旧制高校で私は『三人男』に出会った。なんとあの時代に英語のS教授のテキストが“Three Men in a Boat”だったのだ。私は今もS教授に感謝している。丸谷才一氏の翻訳が出たのはずっと後のことだが、これは大変な名訳だと思う。

（大阪公衆衛生協会 張 知夫）